



採鉱



運搬



広瀬幸平

9 まいん

だいいちつうどう 第一通洞



通洞上の家屋は採鉱課測量事務所

南口 明治23年(1890)撮影
別子銅山記念館所蔵

近代化への号砲が
銅山にとどろく

だいいちつうどう
第一通洞は、別子銅山で初めてできた通洞です。

通洞とは、坑内につくられた輸送用のトンネルのことをいいます。

第一通洞は、代々坑という開さく済みの坑道をもとに、明治15年(1882)角石原へと向けて掘り進められました。

ダイナマイト

の使用実験に、明治13年、日本の鉱山としては初めて成功しています。広瀬幸平は、手掘りからダイナマイトという画期的な道具を使用し、明治19年に、4年という短い工期で完成させました。山中に響くダイナマイトは、別子銅山が近代化へ向けて大きく歩み出す号砲となり、その全長は1,021メートルに及びました。



南口(旧別子側)



北口(角石原側)

第一通洞の開通により、物資の輸送は銅山越をする必要がなくなり、画期的な物資輸送路として別子銅山の近代化を進める原動力となりました。

第一通洞の主な利用方法は、高橋製錬所で製錬された粗銅を新居浜側に送り、新居浜側からは、旧別子地域で使う生活物資を送っていました。

明治26年に完成する別子銅山鉄道上部線(上部鉄道)および下部鉄道と明治30年(1897)に完成する石ヶ山丈～端出場間の索道(空中にワイヤーを張って物資や鉱石の輸送)と並んで、物資輸送の大動脈として活躍しました。

